

豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）や豚胸膜肺炎（APP）など発症の引き金となるものであることを解説した。

また、農場内でのPCV2の分離状況を調べた試験についても紹介。離乳豚舎や候補豚、浄化槽や事務所な

で確認することが望ましいが、費用などの問題もあるので、獣医師に相談の上実践してほしいと語った。

ワクチンの利用に関しては、現在事故率がそれほど高くない農場でも、増体量の増加による出荷日齢の短縮、小貫出荷の減少や、繁殖成績

続いて㈱インターベットの白川氏より、同社の発売したポーシリスPCVに関して「抗体測定とPCR検査で見るサーコワクチンの評価」と題した講演が行われ、ポーシリスPCVの抗体応答などについての解説が行われた。

資制度を活用し、支援を示していた。

11日には、(社)日本養豚生産者協議会が同省を訪れ、赤松広を要請。①1～3月まで、地域肉豚基金を併緊急対策②無担保、無の貸し付け制度新設をに対し、①について与形となる。

緊急支援対策は、豚を対象に、(独)農畜を通じて毎月講じられるは、肉豚省令価格(現の加重平均価格)が豚生産における物財割った場合に、その差額

フランスからの視察団と農場見学 — TOKYO X Association

11月20日、Tokyo X Associationは、フランスからの視察団との交流として、農場訪問を行った。フランスからの視察団は、フランス豚肉委員会の委員長を含み、農務省や生産者、加工品メーカーなど12名。

訪問したのはTokyo Xの肥育を行う吉実園（東京都世田谷区）。農場主の吉岡幸彦さんは、造園業を営むかたわら、Tokyo Xを48頭飼養。本業である造園業の広い土地の中に、一部柵を張ってその中での放牧飼養を行っている。導入は70～90日齢で、肥育のみの飼養。この日は前日の雨で地面がぬかるんでおり、豚たちは楽しそうにヌタ打ちをしていた。

フランスの視察団は、Tokyo Xに高い関心を寄せ、「品種は何か」「飼



興味深げにTOKYO Xの柵を囲む視察団

料は何を与えているのか」といった質問を投げかけていた。

農場の見学後は、Tokyo X Associationが置かれているミートコンパニオン社（東京都立川市）に場を移して、Tokyo Xの特徴などについての解説が会長の植村光一郎氏から行われた。

植村氏は、Tokyo X開発の背景か

ら、生産から流通までが一体となってTokyo X Associationを設立し、おいしい豚肉としてのブランド化を推進したことなどを紹介。

視察団からの、「なぜ、日本食はヘルシーなものとして知られているのに、肉は非常に脂肪分が高いのか」という質問には、「日本人は肉を食べる量がそれほど多くないため、脂肪はある程度あった方がいい」と回答した。また、売価などについては、視察団も強い興味を示していた。

会合の最後には、焼肉レストランの暖らん亭（東京都立川市）に移動し、実際にTokyo Xの試食会が行われた。箸の使い方に戸惑うメンバーもあったが、炭火で焼いた豚肉に舌鼓を打っていた。

